

<前回>近代的知と歴史主義

(1) 近代的知のモデルとしての自然主義

1. 西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解は、この変動に規定されている。
啓蒙主義→実証主義的科学、村上陽一郎の聖俗革命
2. 「近代科学」の自律化：一つの自律的な活動としての近代科学の自立。→啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）の誕生。近代的知のモデル。
4. 注意点：科学の分野における相違あるいは時差

(2) 自然主義と宗教、争点は何か

6. 科学と宗教との対立（近代的知・自律と伝統的権威・他律）とは、双方に原因がある。
7. そもそも、奇跡とは何か。
パネンベルクの奇跡論

759.1/

the concept of miracle has become one of the more intricate problems, because miracles are said to involve a violation of the laws of nature, as David Hume asserted in the section on miracles in his *Enquiry Concerning Human Understanding* (1748).

The concept of miracle as a violation of natural law subverts the very concept of law and in effect exposes the futility of the assertion of miracles.

760.1/

This was not the meaning of the concept of miracle in Christian theology, however. In the biblical writings, the word *miracle* refers to extraordinary events that function as "signs" of God's sovereign power. "signs and wonders"(Daniel 6:27; John 4:48)

Augustine said, "Whatever is unusual, is a miracle"(*quae sunt rara, ipsa sunt mira; De civ. Dei* 21,8,3). Explicitly he emphasized that events of that type do not occur contrary to the nature of things. To us they may appear contrary, because of our limited knowledge of the "course of nature." But God's point of view is different,.....

760.4/761.1

Considering this development, theology should avoid purely objective concepts of miracles as occurring *praeter naturam* or *contra naturam* and return to Augustine's idea of miracle as related to the subjectivity of our human experience of nature, especially to the limitations of our knowledge.

8. John Locke: according to the reason / above / contrary to knowledge / faith 信仰と知との関係、信仰にとっての懐疑の意味(Paul Tillich, *Dynamics of Faith*) 懐疑は信仰の構成要素である。
9. ヒック：自然主義とは何か。→近代の様々な世界観が共有する立場。
自然主義と宗教は論理的には相互に論駁不可能な二つの世界の見方。
→ 宗教的見方にもそれ固有の合理性が認められる。合理性の複数性。
10. グリフィン：広義あるいは狭義の、弱いあるいは強い自然主義の区別。
広義の弱い自然主義への注目→対立を越えて（決定論対自由・意識など）
・強い自然主義：ミクロ・レベルの進化、マクロ・レベルの進化、自然主義、斉一主義、方法論的認識論、実証主義、決定論、マクロ進化のミクロ進化への還元、漸進主義、唯名論、完全な無神論、無意味性・非道徳性、非進歩主義。

・自然主義の多様性と宗教との協調可能性。最初の4つの要素のみを含む弱い・広義の自然主義と、それ以外の諸要素をも含む強い・狭義の自然主義。

cf. 方法論的無神論と形而上学的無神論との区別

4. 近代的知と歴史主義

1. 自然主義と歴史主義

近代的知の二つの動向（因果律の二つのタイプ）

作用連関と意味連関の組み合わせの諸パターン。

→ 自然科学／精神科学、説明／理解

2. 「近代」と人間的現実の歴史化

現実は無常不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。

↓

近代歴史学、歴史的視点

「近代化」の存在論的性格は《歴史化》と呼ばれるものであり、近代世界を貫いた社会変動は、メッサニーが言う「自然」からの「自由」という性格をもっていることに、われわれは注目せねばならない。つまりそれは「自然」から「自由」へという変化、「自由」の介入によって「自然」が「歴史」化する過程でもある。」（大木、上、47）

「四つの相における近代化」「①工業化、②都市化、③民主化、④情報化」（55-60）、「真理から情報へ、これは、真理の歴史化と言ってよい。真理は無常ではない。」（58）

「近代化の深層構造」「①非魔術化・合理化」「②自由化としての近代化」（60-63）、「コスモス」から「歴史」へという《歴史化》が、われわれの歴史神学の座となる。」（62）

3. プロセスとしての自然（外となる自然と自然本性）＝自然史

「自然史の観念は直接的には自然という言葉の十八世紀的用法から起こった」、「種々の事物——物質界、有機体的生命、理念、制度といった——の「自然史」を明らかにすること、これが十八世紀後半、西ヨーロッパのきわめて多くの哲学者たちの目標であった。」（ニスベット、194）。

「この方法の固有なものは、当面の研究に関する「世論や制度の起源を、いわゆる人間的自然の原理や社会の環境から導き出すことである。なかでもとりわけ重要なのは、人間の歴史の自然的行程、つまり人間がこれまでたどってきて、この先も「偶然」や「干渉」が定められた進路……から逸脱させないかぎり、たどっていくはずの行程を明らかにする、叙述の構成である。」（210-211）

「十八世紀における進歩の理念や自然史の理論から、十九世紀における社会進化論の諸相に至るまでの距離は、ごくわずかである。二つの世紀にみられる「進歩」、「発展」、「進展」、「自然史」といった言葉は、ほとんど相互に交換することができた。」（214）

ルソー『人間不平等起源論』（1755）、アダム・スミス『諸国民の富』（1776）、ヒューム『宗教の自然史』（1757）

cf. 18世紀：博物学・自然誌

分類と系統

4. 「歴史主義」の多義性あるいは混乱

歴史主義という用語は、様々な視点から様々な意味を賦与させて使用されている。特に、ポパーとのほかの論者との相違。

「歴史主義」「その悪しき側面から完全に引き離され、人間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化という意味において理解されねばならない」、「しかし、この歴史主義に対して、自然主義が同様に原理的かつ包括的な仕方に対立している」（トレルチ、諸問題・上、158）、「自然主義は、あらゆる質的なことや直接的経験を度外視する法則化の連関として、またそのようなものとして現実総体を包括する連関として理解されなければならない」、「自然主義と歴史主義とは、近代世界の二つの巨大な科学的創造であり、この意味においてそれらは、古代にも中世にも知られていないものであった」（159）、「近代的思惟一般が持っている二つの本質的動機」（164）。

5. 存在レベルにおける歴史・歴史化（存在論的概念）

- ・人間存在の歴史性
- ・聖書的な歴史的思惟（聖書の宗教が歴史的思惟であるという意味）
聖書的人格主義とギリシャ的存在論、動的歴史的と静的形而上学的、といった対比。
- ・近代化が歴史化であるという意味での歴史

↓

歴史・歴史化とはどのレベルにおけるいかなる現象・事態を意味しているのか。

6. 知・人間的現実の地平としての歴史

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物（歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される）である。

cf. 自然法

↓

価値や理想の妥当性はそれが形成生成してきた歴史的連関（文脈）の範囲内に限定される。この限界を超えた普遍化は不可能あるいは間違っている。といった認識あるいは感覚。

相対性の意識＝歴史相対主義→ニヒリズム

「この時代の激動は、倫理学の崩壊をももたらした」（大木、1）、「相対主義の克服とは、相対主義が文化ニヒリズムへと転落する道とは逆の方向を模索することであり、崩落に身を委ねるのではなく上昇の意志をもつことである」、「今日の知的課題は、倫理学の建設である」、「相対的状况を十分知りながら、なお倫理学が倫理学として必然的に求めるべき普遍的な当為を探究する一つの企てがなされる。」（2）

「自然主義は無制限に、あらゆる生活のものずごい自然主義化と荒涼化へと導き、歴史主義はあの相対主義的懐疑に導く」、「歴史的なものの認識可能性と意味とに対する相対主義的な価値的懐疑であり疑惑である」、「これら悪い副次的な意味」、「歴史的素材を使いこなす文化総合へと向かう勇気をふるい起こす歴史哲学を求めている。」（トレルチ、165）

7. 争点：ニヒリズムそして倫理学

決疑論か状況倫理か

8. H・R・ニーバー『啓示の意味』

「理神論者や超自然主義者が十八世紀初頭にかわした奇跡、預言、啓示、理性についてのそうぞうしい論争」、「理性と啓示とは深く傷を負ってしまった」、「勝者と敗者の見わけはまったくつかなくなってしまう」、「懐疑主義」（11）、「キリスト教の精神の諸分野とキリスト教社会の諸機関とは各自の職分に専念し、互いに帝国主義的冒険に乗り出すことなく全体への貢献をしていたのである」（12）、「問題とディレンマとは、歴史相対主義によってもたらされた。」（15）

「観察者が時空において占める視点が、現実についての知識の中にはいりこむこと」、「物事が何であるかという普遍的な知識がありえないこと」(16)、「相対論神学」、「神学が新しい自己理解にみずからを適合させようとしているからである」、「神学は……その対象を直接叙述することは不可能であることを認識せしめられた。神学は心理的経験の総体において与えられた現実を探究することができるだけである。このような自己認識が神学に経験論的方法を採用せしめた。その方法は、批判的観念論と批判的实在論との二重の形を持つ。神学みずからの限界を告白しなければならなかった。つまり、神学は神を神そのものとして叙述することはできず、ただ人間の経験において神を叙述することができるだけであること、しかしこうした限界の中で、神学は従来よりも大きな効果を持って働きうる、ということである」、「批判神学」(17)

「歴史的自己」「相対的要素」

「定言命令が普遍的意味を持つこと自体は疑う余地がない。しかし、カントによるその定式化は歴史的に相対的であり、われわれが今日、カントの思想をふたたび定式化しようとするとき、われわれは、歴史的に制約されていて、普遍的なものも相対的な視点からしか叙述できない思想家としてそうするのである」(19-20)

「形而上学も、また明らかに論理学や認識論も、倫理学と同様歴史的である。哲学的探究のすべての分野において歴史的な方法が確立されてきた」(20)、「この限界以内で働く理性そのものが、その歴史的・社会的性格によって限定されていることを認識せなければならぬ」(21)、「すべての現実がわれわれにとって時間的なものとなったということは疑いもなく正しい。しかし、われわれの相対主義は客体の歴史性よりも、それ以上に主体の歴史性を確認する」、「さらに重要なことは、人の中にある時間は抽象的なものでなく、特定の具体的時間であるということである」(21)、「普遍的思想はあり得ない」、「聖書神学者は、聖書の視点が歴史的、社会的に規定されていることを発見した」(22)、「教義の歴史的起源、教義の解釈者の歴史的背景は無視できないからである。いかなるタイプの神学にとっても、歴史相対主義のディレンマからのがれる可能性はまったくないと思われる」、「もし理性が機能するとすれば、それは歴史的理性として機能することで満足しなければならない」(23)、「批判哲学と批判的神学とは理性的主体に、その新しい自己認識をによって課せられた制約を受け入れ、そして制約を持つ原理によって経験を批判、解釈し、導くという謙遜な任務を引き受けたのである。」(24)

「批判的歴史的な神学は、宗教的生の形態がその神学の歴史的体系の限界を超えたすべての場所で、すべての時代にどうあるべきかを指示することは決してできない。しかしみずからもその一部をなす歴史のわく内においては知的に納得のゆく範型を捜し求めることはできる」(24)、「神学は普遍的な宗教の文法を示すことはできないが、個別的な宗教の文法を示すことはできる」、「教会の中で自己批判と自己認識の仕事を営みつづける告白的神学である」、「相対主義は主観主義や懐疑主義を意味しない。自分の観察が彼の視点によって規定されていることを告白する人が、彼のみている事物の現実性实在性までも疑わねばならないということは自明ではない。自分の持つ概念が普遍的でないことを知る人は、その概念が普遍性についての概念であることを疑わねばならないということも言えない。あるいはまた、自分の経験がすべて歴史的に媒介されていることを理解する人が歴史によっては何物も媒介されないと信じなければならないこともない。」(25)

「われわれが心理的、歴史的に規定された経験において見る事柄を現実として受け入れることは、常になんらかの信仰の行為である。しかしその信仰は不可欠であり、またみずから存在理由を持ち、そのもたらす結果によって正当化される。批判的観念論は常に、陰に

陽に、感覚によって媒介される事柄が、そのものとして実在することを信仰において受け入れる]、「批判的実在論を伴っている」、「歴史的相対主義は歴史的主体に対する批判、歴史によって媒介される批判等、あらゆる批判の中で信仰によっておのが道を歩むことができるし、そうせざるを得ない」(26)、「歴史的信仰は、検証される可能性を持たない私的、主観的なものではない」、「同じ視点に立って同じ方向を見ている仲間の経験による検証や、その共同体内の過去の経験から成長してきた原理や概念との整合性による検証」(27)

「歴史的相対主義は歴史に対する妥当性をも意味する」、「宗教的理性を歴史の領域に限定しつつなお、限定された領域における作業によって、キリスト教の歴史的社会的生の、よりよい知的、実地的な組織が産み出されるという希望を抱くことができる」(27)、「したがって、神学はキリスト教史の内側でキリスト教史から始めなければならない。なぜならば、そのほかには選択の余地がないからである。この意味で神学は啓示から出発することを余儀なくされている。ここで啓示とは単に歴史的信仰を意味する」、「客観的に相対主義的である。」(28)

9. 抽象的な普遍主義・客観主義ではなく、具体性から出発し普遍性を展望する相互主観主義。→ 経験の共有可能性と翻訳可能性を前提にして、他者との合意形成に努力する開かれた知性。批判的実在論。

<参考文献>

1. トレルチ『歴史主義とその諸問題 上中下』（トレルチ著作集4～6）、ヨルダン社。
『歴史主義とその克服』理想社。
2. C・アントーニ『歴史主義』創文社。
3. F・マイネッケ『歴史主義の成立 上下』筑摩書房。
4. K・ホイシー『歴史主義の危機』イザラ書房。
5. K・ポパー『歴史主義の貧困』中央公論社。
6. カール・マンハイム『歴史主義・保守主義』恒星社厚生閣。
7. 田中美知太郎編『歴史理論と歴史哲学』人文書院。
8. コリンウッド『歴史哲学の本質と目的』未来社。
9. リクール『歴史と物語 I II III』新曜社。
10. E.H.カー『歴史とは何か』岩波新書。
11. ゲオルク G・イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
12. H.R.ニーバー『啓示の意味』教文館。
H. Richard Niebuhr, *The Meaning of Revelation*, Macmillan, 1941.
13. 大木英夫『新しい共同体の倫理学 基礎論 上下』教文館。
14. 大林浩『アガペーと歴史的な精神』日本基督教団出版局。
15. その他
カール・レーヴィット『歴史の意味』未来社。
ニスベット『歴史とメタファー 社会変化の諸相』紀伊國屋書店。
アルフレート・シュミット『歴史と構造 マルクス主義歴史認識論の諸問題』
法政大学出版局。
ポール・ヴェーヌ『差異の目録 新しい歴史のために』法政大学出版局。
ドミニク・ラカブラ『歴史と批評』平凡社。
アーサー・C・ダント『物語としての歴史 歴史の分析哲学』国文社。